

井上靖「澄賢房覚書」論 —— 創作背景と典拠について ——

李 鈺

Abstract

Inoue Yasushi published the short story "Cyokenbo oboegaki" in the *Literary World Magazine* in June 1951. Inoue Yasushi quit his job at the Mainichi Newspaper, finishing his 15-year journalist career in May 1951. After one month, he started a new life for literary creation as a professional writer. He also combined his experience as a journalist and knowledge of Buddhism into his work. "Cyokenbo oboegaki" is his first short story that is based on a monk story.

"Cyokenbo oboegaki" was written in the first-person perspective to develop the story. The story happened on the Koyasan mountain. The main characters are "me", "my friend Yoshimura Yoshiaki", the leading character "Cyokenbo" and his friend "Koei". The first half of the story tells Cyokenbo's emotional entanglement between three women after he got expelled from the Koyasan Temple. In the latter half of his life, he concentrated on Buddhist Scripture research. He spent 20 years of his life on writing the "Prajna Riomomukikei explanatory notes" and he completed it. He wanted to give his work to his old friend "Koei". However, when he met "Koei" who already became eminent monk at

Koyasan Temple again after 50 years, he wasn't able to hand his work over. Then he froze to death on the wayside. That is the second half of the tragic story.

In 1993, a movie called "KOYA Cyokenbo oboegaki" based on this short story was on screen. However, according to my research, there are few research papers related to this novel even today. Only a small number of research papers have mentioned the novel, but never goes into deep research on the character image creation background and the references. Therefore, this paper attempts to organize previous research and analyze Inoue Yasushi's creation background, and then deduce the references.

キーワード：……高野山 文観上人 水原堯栄 井上吉次郎

一、はじめに

井上靖の短篇小説「澄賢房覚書」は、昭和二十六（一九五二）年六月一日発行の『文學界』六月号（第五卷第六号）に「澄賢房覚え書」⁽¹⁾の題で発表された。その後、『ある偽作家の生涯』（昭和二十六年十二月、創元社）に収録され、その際、「澄賢房覚書」と改題された。

第二十二回芥川賞を受賞後の昭和二十六年五月、井上靖は毎日新聞社を退社し、同社の社友となり、昭和十一年から十五年間に

わたる新聞記者の生活に終止符を打った。一か月後、職業作家として、記者時代に蓄えた仏教知識を活用し、僧侶が主人公の小説を初めて創作する。それが「澄賢房覚書」である。

「澄賢房覚書」の語り手は一人称の「私」である。高野山を訪れた「私」は偶然、古い日記の断片を発見した。その日記に記されていた澄賢という名から、かつて学生時代に古本屋で買った『般若理趣経俗詮』という註釈書のことを思い出した。「私」は註釈書の作者に興味を覚え、高野山から追放された澄賢の一生を探していく。

「澄賢房覚書」は、志半ばにして破戒僧となり高野山を降りた僧・澄賢が、五十年ぶりに高野に登り、高僧となったかつての同輩の宏栄に再会するという物語である。小説「澄賢房覚書」は二部構成であり、前半は「私」の視点から描かれている。後半は澄賢の日記のような記述であるが、澄賢のそばで、身分が不明な傍観者（語り手は「自分」、「彼」である。）が語っている。澄賢房の前半については、「私」の現地調査を通して、「相当烈しい情痴の世界が繰り展げられていた」僧侶像が浮かんでくる。また、大学時代の「私」の調べた限り、女性関係の事件で高野山を追われた時から、橋本の町へ現れた時まで、常に「袈裟」を離さない澄賢の僧侶像が浮かび上がってくる。小説の後半では、澄賢が「高野に帰って来た」後、かつての友人宏栄に会ったが、自著の『般若理趣経俗詮』を宏栄に渡せなかった。結局、澄賢は宏栄の寺から出た後、山中で凍死してしまった。

平成五年には本小説「澄賢房覚書」をもとにし、高山由紀子が脚本を執筆した『KOYA 澄賢房覚え書』が映画化された。

しかし、執筆者が調べた限り、「澄賢房覚書」を中心とした先行研究は非常に少ない。また、それらの先行研究には、「澄賢房覚書」の登場人物の分析や、創作背景への考察、小説の典拠などについての記述は見受けられない。

本稿では、まず、本作に関わる時評、先行研究を整理した上で、作者井上靖が高野山に注目した背景を論じる。その背景から、小説の典拠を推定したい。

二、先行研究について

『井上靖全集』別巻に収録の藤本寿彦編「井上靖参考文献目録」⁽²⁾に「澄賢房覚書」に関する時評が以下の①②の二つに掲載されている。

①「文芸雑誌評」欄

高橋義孝「新潮の二作品」(『夕刊毎日新聞』昭和二十六年五月二十四日)

「異邦人」の感覚と井上靖「澄賢房覚え書」(文学界)の行き方とを比較すると面白い。

② 「文芸時評」欄

山本健吉「何のために」描く——『デスマスク』や『春の草』

〔『新大阪』昭和二十六年五月三十日〕

井上靖の「澄賢房覚え書」(文学界)は、一種の考証小説として、探偵小説的な興味で引きずられたが、最後に空想的になぞった部分ではぐらかされた。澄賢の人物像が、急に文学くさくなってしまうからである。

① 高橋の評では、アルベール・カミュの「異邦人」と久保栄「のぼり窯」を評論する際、この小説に言及している。② 山本は本作を、「探偵小説」のように創作されたが、終盤部分の澄賢像が「文学くさくなつ」たと述べている。

『井上靖研究』第十二号、十三号、十四号、十七号掲載の「井上靖参考文献目録」⁽³⁾を参照してみても、「澄賢房覚え書」を主題とする論文、資料、口頭発表、講演などは見当たらない。

さらに、神奈川県近代文学館に所蔵の特別資料館のデータベースの中にも、「澄賢房覚え書」関係の資料は見つけられなかった。資料課・特別資料係藤木尚子の指摘によると、「澄賢房覚え書」評⁽⁴⁾という資料があるが、これは映画『KOYA 澄賢房覚え書』が公開されるにあたっての紹介文であり、井上靖の原作の作品評ではないという。

それ以外に、他の論考で小説「澄賢房覚え書」に言及しているも

のを③④⑤に引用する。

③ 福田宏年「井上靖の文学様式」〔『井上靖研究』昭和四十九年四月、南窓社〕

〔「澄賢房覚え書」は…執筆者補足〕井上靖の文学の中で大きいフアクターをなしている。いま一つ大きいフアクターは、劣等感情である。劣等感情は「あすなる物語」「霧の道」「ある偽作家の生涯」「澄賢房覚え書」などの作品に顕著な形であらわれ、さらに歴史小説の『敦煌』にまで尾を曳いている。

④ 八木義徳「脱落者の悲哀」〔『国文学』昭和五十年三月号〕

「澄賢房覚え書」の澄賢もまた人生をおりた——というより、正しくおろされた人間の一人である。(中略)
ところで、この澄賢はかつての友である宏栄の前に対した時、敗北者としての自分を認めたであろうか。おそらくそうではあるまい。(中略)

それは言ってみれば、一方は高野山という特殊な一世界の中で、一生不犯の僧として生きてきた人間と、他方は女犯の罪によって下界におろされ、その下界の底をさまざまな罪を重ねながらくぐり抜けてきた人間と、この両者の間に置かれた壁である。

しかし、仏とは罪を犯した者のために在るのではないか。それなら仏の大慈大悲の光により近いのは宏栄であるか、それとも澄賢であるか？ 眞の勝利者は果たしていずれであろう。

⑤何志勇（井上修一インタビュー）「父親としての井上靖と作家としての井上靖」平成二十四年三月二十日『井上靖研究』第十二号、平成二十五年七月）

劣等感に戻れば、父はブルドーザーでしたが、例えば、「あすなる物語」も一種の劣等感の克服の本だなどという気もしますし、劣等感に取り付かれた人物をたくさん主人公にして父は小説を書いている。

「澄賢房覚書」という短編があります。高野山で修行して破戒僧になって、没落していく僧と、もう一人、厳しい修行に耐え、出世して高野山一の高僧になる僧、その二人の人物を書いた作品です。片方は山から降りて、遊廓に入ったりして半ば不良のやくざになる。片方は修行を続けて高僧になる。この二人が年取ってから出会うのです。ところが、破戒僧のほうに人生を生きてきている。秀才の大僧正のほうに修行しただけで、人生がなにも分かっていない。高僧を見て破戒僧のほうがコンプレックスから解放されるという小説です。

③福田は井上靖文学の全体から分析し、小説に隠された作者の劣等感情を示している。④八木は、一生不犯の高僧宏栄より、高野をおろされた澄賢の方こそ仏の眞理に近い者と捉えている。破戒僧澄賢の人生は最後に「眞の勝利者」になったとする。（作者井上靖が澄賢の僧侶像を通して、読者にどちらが仏の光に近い者であるかと疑問を呈している。）⑤井上修一は、澄賢は最後に「コンプレックスから解放」された（主人公である）と指摘している。以上の、①から⑤にかけてが、「澄賢房覚書」にかかわるすべての先行研究である。

三、創作背景

前節で述べたように、小説の人物像の史実性や作品の典拠などは十分に検討されていない。

そのため、まず、小説の主人公の史実性を検討してみたい。その点について、井上靖自身は「あとがき」^⑥で、以下のように明確に書いている。

「澄賢房覚書」は昭和二十六年六月号の『文学界』に掲載したものである。主人公澄賢房は実在の人物ではないが、このような修行途上、高野山を追われた人物はたくさん居る筈で、そうした人々を代表して、澄賢房なる人物に小説の中に登場して貰った次第である。この作品を書くことができた

のは、新聞記者時代から高野山に多少の関係を持っていたからであり、「若き日の高野山」なる随想一篇を再録して、この作品の自作解題に替らせて頂く。

主人公澄賢房は虚構の人物であるという。

「澄賢房覚書」は高野山を舞台として創作された小説である。昭和十三年から、毎日新聞社にいた井上靖は文芸部長井上吉次郎に命じられて美術欄と宗教欄を担当した。そのため、仕事の関係でよく高野山を訪れていた。このことは、「あとがき」でも言及されている。作家自身のエッセイ「若き日の高野山」⁽⁶⁾や、藤澤全が編集した井上靖年譜などの資料⁽⁷⁾に記されている。そこから、本小説の創作背景を窺うことができる。

まず、井上靖と高野山のつながりを、簡単に整理してみよう。

・昭和十三年、「東洋美術大展覧会」が開催されてからあまり経っていない時期に、井上吉次郎に命じられて高野山の「堅精論議」を取材するために、「初めて宗教記者として高野山に出掛けている」。堅義は水原堯栄（親王院住職）、精義は稲葉宗瑞（本覚寺住職）である。注記は中川善教である。その後、「毎年、高野山で新聞社主催の夏期大学が開かれたが、その時の講師の講演の内容を短くまとめて学芸欄に発表するために出掛けたこともある」と井上靖は述べている。

・昭和十五年、『大阪毎日新聞』宗教欄に「本山物語」という連載記事を掲載するために、高野山に取材に出掛ける。同年六月十六日、「本山物語18」——金剛峯寺（無署名）が『大阪毎日新聞』に掲載された。

・昭和十八年、上司の井上吉次郎から、高野山の末寺が二つ空いていると聞かされ、二人は一緒に僧侶の筆記試験に行き合格した。井上吉次郎は修行中、廻廊から落ち、受験を断念する。井上靖は風邪のために、三回目の僧籍試験を欠席する。

・昭和二十一年七月、高野山で開催の、毎日新聞社主催の日本棋院本因坊戦の対局場の運営を担当する。

・昭和二十三年二月の末から三月上旬まで、高野山で開催された日本棋院第七期名人戦挑戦者決定戦の運営にあたる。

以上の内容から、井上靖は高野山と縁が深いと言えるだろう。高野山に関する話を題材とし、小説「澄賢房覚書」を創作することは自然のことであると考えられる。記者時代の井上靖に、部長井上吉次郎と、水原堯栄、中川善教両師の三人は深い影響を与えた。さらに、それについて、「若き日の高野山」⁽⁸⁾で、以下のよう

二十六年の春、「澄賢房覚書」という小説を書くために高野山を訪れた。（中略）「澄賢房覚書」という小説では、若くして高野山を追われた僧侶が主人公になっているが、若い頃の高野山における修行や経典関係のことになると、お二人の助力を仰ぐ以外仕方なかった。またこの小説には何か所かに古文書の文章が出て来るが、古文書の文章には、古文書の文章としての独特の調子があるので、すべて中川師に添削加筆を仰ぐほかなかった。

「お二人の助力」とあるが、その二人は水原堯栄と中川善教のことである。小説「澄賢房覚書」を執筆するために、井上靖は親王院に泊まった。その時、井上靖は水原と（弟子）中川の二人から追放僧の話を聞いたのではないだろうか。また、小説「澄賢房覚書」において、「古文書の文章としての独特の調子がある」という部分は、合計四箇所⁽⁹⁾ある。

その四箇所の文章は、井上靖が下書きをし、「中川師に添削加筆を仰」いだものである。小説での、「十月二十六日、大門より…」（10）という部分は、井上靖は記しておらず、この部分も「中川師に添削加筆」してもらった可能性が高いと考えられる。

前述したとおり、新聞記者時代の井上靖は何回も高野山を訪れていた。小説「澄賢房覚書」の「日記の断片」の添削加筆も中川善教に頼み、新たな視点から破戒僧の像を設定したと言える。

井上靖は高野山を追われた僧侶の代表者（11）として、澄賢を小

説中に登場させている。しかし、高野山の破戒僧に注目する理由は、「澄賢房覚書」の「あとがき」の中には、明確に書かれていない。それでは、井上靖はなぜ高野山の高僧ではなく、女犯により追放された破戒僧に注目したのだろうか。井上靖が参照した高野に関する資料に注目したい。そして、小説中に見られる著書が高野の諸書として実在のものかどうかについて考察を進めたい。

小説の冒頭部分に、高野に関する書籍が何冊か記されている。

高野に関する古いことを験べるには修禪院懷英の『高野春秋』とか、『検校帳』とか『高野物語』とかいろいろの書物があつて、それらはいずれも印刷物になって世に公にされているが、最近『折負輯』という全く今までに誰にも知られていない写本十巻が発見されたということである。その『折負輯』なるものは一口に言えば天保六年までの高野諸寺院の過去帳を輯めたものであつて、その資料的価値に至っては量り知れないほど大きいものがあり、取りあえず吉村はそれを書き写しておくことにして（後略）

小説「澄賢房覚書」において、高野に関する寺院史料としては『高野春秋』、『検校帳』、『高野物語』、『折負輯』が挙げられている。それらが、実在する資料かどうか、題名を頼りに調べてみた結果は以下のとおりである。

① 『高野春秋』

『仏書解説大辞典』第三卷⁽¹²⁾には、『高野春秋編年輯録』(以下、『高野春秋』という。)について、以下のように述べられている。

弘仁七年弘法大師高野山開創以来本年に及びて千二百二十年、その間時に興廢あつたことは免れないけれど、残る所の文献古文書は夥しい。特に本書の編せられた時代は一層沢山のものがあつたと想像せらる。それらの中より幾多の資料記録類を、編年体に輯録し、一山の歴史を明にしたものが本書である。高野山の歴史は古くして、然も未だかゝる総合的な歴史書を有せざる時に当たり懷英が敢て本書を編纂した苦勞は多とすべきである。勿論かゝる事業に材料の取捨、年次の前後等史家の満足し得られないものゝあるは免れないことにして、本書にも亦かゝる欠点が存することであろう。古来高野山には学侶・行人・非事吏という三派あり。本書に録する所は主として学侶の事歴であると難ぜらるゝ点あらんも、上記の意味に於て珍重すべき高野山史の一大雄篇である。

また、日野西眞定は「これまでになかつた高野山史をはじめ本格的に編纂した点など功績は大きく、高野山史研究の基本史料の一つ⁽¹³⁾」と評価している。

小説の冒頭で、この信憑性が高い史料を例として挙げ、小説の

内容の信頼性も高める意図があつたであろう。

② 『検校帳』

国立国会図書館の所蔵資料を検索すると『検校帳』の存在が確認できる。小説に出てきた『検校帳』は『高野山検校帳』であると思われる。この『高野山検校帳』は『大日本古文书』第八卷の『家わけ第一之一——八「高野山文书」⁽¹⁴⁾』に収録されている。『高野山検校帳』では、三百九十六頁から四百六十四頁にかけて、第一代から第二百八代までの歴代の検校の項目が記されている。小説の冒頭部分では、『検校帳』に言及し、後の展開の伏線としている。例えば、小説「澄賢房覚書」の中で、宏栄のことを以下のように記述している。

それから彼は念のために、明治の末期に行われた親王院における灌頂の記録を探し出し、それに関係した僧侶を調べてみたのであるが、大阿闍梨として宏栄はそれに出席しているというのであつた。そして、宏栄と言う人の履歴を三枚の便箋に簡単に書き記したものを、私の前に差し出した。

宏栄は天保六年能登に出生、弘化元年に得度、嘉永五年十八歳にして高野山A院の住職となる。こういった調子で、それから幾つかの寺院へ転住した年月、小講義、中僧都、大僧都、小僧正、権大僧正等に補せられた年月、あるいは又検校法印に昇進した年月等が詳しく列記されており、明治四十四

年宏栄は七十七歳の高齢で遷化しているのであった。

つたと言える。

小説「澄賢房覚書」では宏栄は寺務検校執行に昇進している。前述したように、『高野山検校帳』には歴代検校が記されており、この史料が宏栄の履歴を紹介するために採用されたのは自然であろう。

③ 『高野物語』

醍醐寺三宝院蔵『高野物語』は、全五巻をもって、前半に教義を表し、後半に歴史を説き、高野山を象徴する真言密教の聖なる領域が浮かび上がる仕掛であるという。また、享徳三年の写本、仮綴二冊、上冊に巻一、二、下冊には巻三、四、五が収録される。その下冊は、鼠害により綴目が損じ各丁が離れたまま、一括となっていた。その中で、親王院本により巻四と巻五が翻刻されている。阿部泰郎の『高野物語』の再発見によると、「高野山親王院に蔵する『高野物語』巻四・五の零本と一致する部分が配列されたに止まり、残る巻三の分についてはその概略が報ぜられたのみにて、全体の量の三分の二程度を存すに過ぎぬと推定され、他は散逸した」⁽¹⁵⁾と云う。

井上靖は高野山親王院に『高野物語』が収蔵されていることを知っていた。この史料『高野物語』の散逸により、その時代の高野山は神秘的な色合いに満ちることになった。井上の小説の展開も彼の想像力にまかせられる部分が多くなり、不自然ではなくな

④ 『折負輯』

小説に書かれている『折負輯』について、高野山大学図書館課長・田寺則彦は、『金剛峯寺諸院家折負輯（ゴンゴウブジショイ）ンゲセキフシユウ』⁽¹⁶⁾と指摘している。

小説における『折負輯』は『金剛峯寺諸院家折負輯』と同一史料である。『金剛峯寺諸院家折負輯』には、住職位の僧侶のみ記載されているため、一般の僧侶たちのことは載っていない。したがって、小説の冒頭部分で、住職に関する記録は明記されており、「予想外に簡単にあれ（日記断片・執筆者補足）が宏栄の筆と全く同じものであることが判明」したのである。これに対して、小説の「私」が澄賢のような追放僧の記載を見つけられなかったという設定も、自然に感じることができる。

四、井上靖が参照した立川流の論考

(一) 立川流と『理趣経』

前節で述べたように、井上靖は記者時代に高野山の関係者から歴史資料を収集した。そのため、厳密に言えば、澄賢という僧侶の一生は虚構のものではあるが、罪を犯し高野山を追われた僧侶の話に基づいて澄賢という僧侶を設定したと考えられる。井上靖

が言うように、澄賢はその「代表」としての僧侶である。

では、井上靖が参照した高野山の史料は、『高野春秋』、『金剛峯寺諸院家析負輯』以外に、どのような史料があったのだろうか。

まず、小説に繰り返し出てくる『理趣経』のことに留意しなければならぬ。

『理趣経』は密教経典である。『般若理趣経』と呼ぶこともある。主に真言宗各派で読誦される常用経典である。理趣とは、道筋の意味であり、「般若の知恵に至るための道筋」の意味である。他の密教の教えが総て修行を前提としているため、専門の僧侶でないと読んでもわからないのに対し、『般若理趣経』は行法についてほとんど触れておらず、一般向けの密教の入門書という位置づけである。

水原堯栄の『邪教立川流の研究』(17)によると、『瑜祇経』、『理趣経』、『宝篋印経』、『菩提心論』は真言立川流の「三経一論」になった。したがって、小説の主人公澄賢が半生をかけて書いた経典『般若理趣経』の注釈書は、立川流に深い関連を持っていると言える。以下に、立川流のことを紹介する。

通説では、平安末期の仁寛が流祖とされ、南北朝期に文観によって大成されたと伝えられる。しかし、宥快らによって邪教とされ、立川流の典籍は焼き捨てられた。そのため伝存する資料が少なく、実態は不明である。『邪教立川流の研究』によると、「立川流の教格は、申すまでもなく、男女妙合、そのもの、そのまゝが即身成仏で、これを置いて他に即身成仏の妙諦もなければ、仏教

の第一義諦もあるものでないといふを根柢として生れてゐる宗派であることは事実である」(18)と述べている。

立川流についての史料は少ないが、その宗教に詳しい人物に水原堯栄がいる。ラポー・ガエタンの研究(19)では、井上靖が記者時代、水原堯栄から高野山の経蔵なども見せてもらうような深い関係であったという。しかし、ラポー・ガエタンは、水原堯栄が井上靖に具体的に何をさせたのかは論じていない。

おそらく、井上靖は、水原堯栄、そして新聞社の上司であった井上吉次郎を介して『理趣経』に目を向けるようになったと思われる。それでは、井上靖は水原、井上吉次郎からどのような話を聞かされたのだろうか。その二人の著作を取り上げながら、考察を進めたい。

水原堯栄は大作『邪教立川流の研究』において、立川流の大成者文観の生涯を論じている。この大作は、後醍醐天皇の寵臣であった文観上人が、硫黄島へ流罪となった波乱の一生を書いている。この中には、「立川流の大成者文観」や、「文観の理趣経秘註を読む」(20)といった、立川流についての考証があり、「文観は当時の一偉才であったことは諍はれない事実である。斯くの如く英俊の才なるが故に立川流の完成を遂げ一世を風靡する一大勢力を得たのである」(21)と述べている。

しかし、井上靖が水原堯栄の立川流の専門書を参照していたとしても、この本が直接に「澄賢房覚書」を書く動機につながったと証明するのは難しい。それ以外に、小説を書くまでに、井上靖

が何を読んだのか。彼の記者生活時代に戻って推察してみよう。

（二）『文観上人』の影響

結論を先に言えば、執筆者は第三節で述べたように、井上靖と仏教の縁は、彼の記者時代の環境から生まれたものであると考えている。昭和十一年に大阪毎日新聞社に入社し、軍隊除隊後再び学芸部に復帰し、井上吉次郎部長の命令で宗教欄を担当する。当時、井上靖は井上吉次郎の著書に注目したと考えられる。それは小説『文観上人』である。

井上靖の小説「澄賢房覚書」創作の原点は、井上吉次郎の小説『文観上人』であると推測される。

井上吉次郎は、短編小説「紅蓮三昧」を、昭和七年七月九日から三十日にかけて『大阪毎日新聞』夕刊に計十九回連載する。その後、「紅蓮三昧」は、文観上人に関する研究史料と立川流への観点を合わせ、『文観上人』と改題されて、昭和十二年六月に人文書院より単行本として刊行された。この『文観上人』に対して、発行所人文書院は広告で激賞している。

小説にして、これ程難しいもの、これ程興味あるもの、これ程官能的であるものこれ程の心理描写は、日本は勿論、外国文学にもその例をみないであらう。さもあらばあれ、此小説は、大朝の直木三十三の「弘法大師」が、同氏物故により

釈瓢齋翁がつづみて執筆し、好評噴々たるをみて伎養にたえず、ものしたもので、芸術としても最上にある作品と信ずる。

『文観上人』は三つの部分に分けられる。文観上人に関する小説部分は一頁から八十四頁までである。続いて文観の一生の紹介があり、この部分が「註一」（八十七頁―百四十七頁）と題されている。さらに、「解一」（百四十九頁―百七十一頁）と題された哲学的エッセイをつけ加え、立川流関連の史料を紹介し、文観のことを紹介している。最後の部分では、「秘密五輪集 無畏三蔵撰」の原文を「附文」（百七十三頁―百八十三頁）として翻刻している。『文観上人』「解一」（百六十四頁）²²には以下のように書かれている。

中院流に邪法の交ること龍先院の先師源照円定房下野へ流され邪法を相伝す、此を明澄賢擔勝深是の如く次第に相承す、仍つて彼方の流には邪法交るなり。

ここに「明澄賢擔勝深」の名は記されるものの、『文観上人』において、「澄賢」に関する記述は、ここにしか見られない。

『文観上人』に見出せる「澄賢」と、小説中の女犯破戒僧澄賢が同一人物であるか否かは確定できないが、井上靖が井上吉次郎の『文観上人』を参照した可能性があるものと推測できる。

次に、両作品における『理趣経』に関する部分を検証したい。

以下に、『文観上人』の「註一」の部分を取り上げ、「澄賢房覚書」と比較してみる。

『文観上人』九十七頁～百二頁)

こんな超自然法力を広く信じてゐた。この力の体得に多年の勤行を要した。到達した行者ばかりが持つ特別の力だった。文観、永年の修行にこの力を磨いた。こんな祈禱の技師として当代に社会的地位を認められたのである。文観の著述として残るところのものも大方は、この技術の法である。文観の著書として考証されてゐるもの。

一、観音経秘鍵一卷(未発見)

一、註理趣経四卷

興国四年十二月

一、理趣経法一卷

延元四年六月七日

一、理趣経法

延元四年六月二十九日

(中略) 具支灌頂重職秘決といふメモ風のもの一卷、意を失つて初めて学僧らしく、註理趣経四卷、梵卷同名網釈の二著が出てゐる。

『澄賢房覚書』四百六十八頁)

三条寺町に殆ど仏教書ばかりで店を飾っている一風変わった古本屋があるが、その書棚の一隅で背に『般若理趣経俗詮』と墨の細字で認められた和綴じの書物を見付け、別に大して深い意味もなく、それを抜き取って、その頁を繰ったのであるが、本論の書出しが、一般の仏教書とは全く異なった感じの文章で始まっているのに一寸気持を奪われて、読むともなしに、半頁ほど、まるで活字かと思われるほど一字一字丁寧に書かれてある楷書の字面を追って行つた。

以上のように、「澄賢房覚書」と『文観上人』には『理趣経』について言及された部分がある。井上吉次郎の小説で、文観は長年の訓練を経て、祈禱の技師になつた後、『註理趣経』を著したといふ。『註理趣経』では、男女陰陽の道と即身成仏の秘術を詳述している。『文観上人』の小説部分では、男女交合の場面も描写している。こうしたことから「澄賢房覚書」の女犯破戒僧澄賢の人物像は、男女陰陽の道を信じている。立川流の僧侶の像を投影している可能性があると考えられる。

また、井上吉次郎の『文観上人』の「註一」、「解一」では、立川流の観点としての「凡身即仏」(23)に関して述べられている。そして、小説「澄賢房覚書」にも同じような表現が見られる。

『文観上人』五十五頁）

即身成仏、凡即仏身、そうれ、わが身たつた今、一瞬の間に、人道得道が適うたぞ。

（「澄賢房覚書」）

三毒五欲直ちに十七尊清浄の内証法門、当相即道、凡身即仏の秘趣、森羅として喫茶喫飯の中に在り。

上述の比較を見ると、小説「澄賢房覚書」の内容と『文観上人』の記述に類似点が見られるのである。「即身成仏」の道は、得道の方法として提唱している。

（三）宏栄の原型

ラポー・ガエタンの先行研究から、「水原堯栄との深い交流が存在」するために、井上吉次郎が『文観上人』を執筆できたことは明らかである。さらに、ラポー・ガエタンは井上靖と水原堯栄の親交について、次のように述べている（24）。

記者時代には、経蔵なども見せてもらうなど深い関係にあったようである。井上靖が結んでいた親交を考えると、それ

以前から兩人（水原堯栄と井上靖…執筆者補足）と知り合っていた井上吉次郎も同程度かそれ以上に彼らと深くかかわっていたと考えるのが自然である。

井上靖の記者時代、水原堯栄からどの「経蔵」を見せてもらったのか、ラポー・ガエタンの研究には見当たらない。今まで公開された資料には、何も記録は残っていないが、井上靖は水原から特別の指導を受け、立川流についてよく知っていたと考えられる。

また、井上靖が水原から特別な指導を受けたと考ええると、高僧宏栄の原型は水原堯栄であると考えられないだろうか。執筆者は、宏栄という登場人物は、水原堯栄と、その師水原弘栄とを原型としているのではないかと推測している。

一つ目の理由は、宏栄も水原堯栄も住職になった経験があることである。宏栄は「嘉永五年十八歳にして高野山A院の住職」、「検校法印に昇進した年月等が詳しく列記されており、明治四十四年宏栄は七十七歳の高齢で遷化」したと設定されている。水原堯栄は、明治二十三（一八九〇）年一月十日に生まれ、昭和二十二年から昭和四十年にかけて、清浄心院の住職となった。また、水原堯栄は親王院の住職であった。

二つ目の理由は、宏栄という人物の名前の発音は水原堯栄の師の名前と一致していることである。水原堯栄は高野山親王院の水原弘栄に師事する。宏栄は虚構人物であるが、「こうえい」という名の読み方は弘栄と同じである。

三つ目の理由は、小説「澄賢房覚書」において「S院」は親王院または清浄心院のことであると推測できることである。「それから半時間後に澄賢はS院の一間で宏栄と対い合って坐っていた」と描かれている。水原堯栄が住職となった親王院、清浄心院の頭文字は「S」音である。その故、小説に使われる「S院」は、水原堯栄が住持した親王院または清浄心院であろうか。

四つ目の理由は、宏栄に関する描写が「若き日の高野山」にある水原堯栄の描写と似ていることである。小説「澄賢房覚書」には、「彼等は二列縦隊を作って静かに筵道に歩みを進めて来た」、「澄賢は両側に金剛峯寺と染め抜いた提燈を提げて厳しい雰囲気を作って親王院の門前を離れた」、「宏栄は二枚重ねた羽二重の白い座布団の上に坐り」と描かれている。「若き日の高野山」では、水原堯栄は「紅白の布団二枚重ねた上に」坐る。水原堯栄の「先頭は素足に草鞋、萌黄色の角帯、尻からげといたいでたちで、足許提燈には燈がともっている。新浄下駄を持った家来と侍僧二人、あとから見送りの人が三、四十人続いている」(25)と描写している。「提燈」、「座布団」も使用している。また、小説にも、「若き日の高野山」にも高僧が登場する時、相当な人数の従僧が住職に従うという描写が見られる。

以上のように、井上靖は水原堯栄をモデルとして、彼の師水原弘栄の名を借り、小説「澄賢房覚書」の高僧宏栄という虚構の人物を作り出したと考えられる。

五、おわりに

本稿では、「澄賢房覚書」の創作背景、小説の典拠を中心として考察を行った。

昭和十三年、軍隊除隊後の井上靖は大阪毎日新聞社に復帰したが、ほぼ同じ頃に当時の文芸部長井上吉次郎が『文観上人』を刊行した。単行本『文観上人』の「註」と「解」で言及された立川流は、井上靖が高野山に注目するようになった原点であると推測される。その後、宗教欄・美術欄を担当する井上靖は、取材するために、足繁く高野山を訪れた。そして、井上靖は小説の「日記の断片」の添削加筆も中川善教に頼んだ。水原堯栄の立川流に関する研究を参照した上で、破戒僧「澄賢房」の僧侶像を設定した可能性が高いと考えられる。高僧のほうは、水原堯栄をモデルとして、彼の師水原弘栄の名の読み方「こうえい」を借り、宏栄という人物を設定したと考えられる。

井上靖が記者時代から小説を発表するまで、およそ八年間が経過している。「澄賢房覚書」は井上靖にとって僧侶を題材とする初めての小説である。しかし、本稿では、作中人物の人物像に関する考察はできなかった。その点を今後の研究課題としたい。

※「澄賢房覚書」の本文引用は、総て『井上靖全集』第二巻（平成六年六月、新潮社）による。

本論文中の引用は、仮名遣いは原文のまま、漢字の旧字体は新

字体に改める。また、引用部（中略）は、執筆者による。

〈注〉

- (1) 『井上靖全集』第二巻「解題」によると、昭和二十六（一九五一）年六月一日発行の『文學界』六月号（第五巻第六号）に「澄賢房覚書」の題で発表された。「覚え書」から「覚書」に変わった理由、具体的な時間などの情報は載っていない。
- (2) 『井上靖全集』別巻（平成十二年四月、新潮社）
- (3) 年に一号刊行の『井上靖研究』は、平成三十年まで計十七回刊行されている。『井上靖研究』第十二号掲載の「井上靖参考文献目録」には、平成十一年一月から十五年十二月までの参考文献が掲載されている。第十三号掲載の目録は、平成十六年一月から平成二十年十二月までのものである。第十四号掲載の目録は、平成二十一年一月から平成二十五年十二月までのものである。第十七号掲載の目録は、平成二十六年一月から平成二十八年十二月までのものである。
- (4) 「澄賢房覚え書」評（県立神奈川近代文学館「井上靖文庫」所蔵資料番号 1-01-520-00074579）
- (5) 井上靖『ある偽作家の生涯』（昭和二十六年十月、創元社）
- (6) 井上靖「若き日の高野山」（『藤本四八写真集——高野山——』昭和四十八年六月、三彩社）
- (7) 藤澤全編「井上靖年譜」（『井上靖全集』別巻、平成十二年四月、新

潮社）。

(8) (6) に同じ。

(9) 以下、井上靖が「若き日の高野山」に提示している部分を示す。頁数は『井上靖全集』第二巻による。

① (469頁) 樗櫨の材を以て（中略）三毒五欲…

② (468頁) 若年の日年預より下山申しつけられ（中略）由有る哉。

③ (465頁) 十月二十四日、天晴、（中略）面晤数剋、茶を喫す。

④ (470頁) 熟と往事を（中略）三世十方悉くこれ一塵のみ。

(10) 以下は小説「澄賢房覚書」の本文である。

(469頁) 十月二十六日、大門より：

しかし、井上靖の「若き日の高野山」では、この段落に筆を入れた者が中川善教であるかどうか明示していない。

(11) 井上靖「あとがき」（『井上靖歴史小説集』第十一巻、昭和五十七年四月、新潮社）

(12) 『仏書解説大辞典』第三巻（昭和四十年六月、大東出版社）

(13) 日野西真定編集校訂『新校高野春秋編年輯録』増訂第二版（平成十一年一月、岩田書院）

(14) 『大日本古文书』（明治三十六年—明治三十九年、東京帝国大学文学部史料編纂所）

(15) 阿部泰郎『高野物語』の再発見」（『中世文学』第三十三号、昭和六十三年三月）九十三頁

(16) 田寺則彦「文鏡秘府論校勘考——難字・異体字の翻刻について——」（第十一回佛教図書館協会研修会講演記録、平成十八年九月二十一

日)によれば「折」と「折」は異体字の関係にみる。

(17) 水原堯栄『邪教立川流の研究』(大正十二年五月、全正舎書籍部)。

この著作は、現在、国立国会図書館の近代デジタルコレクションで閲覧することができる。

(18) (17)に同じ。十五頁。

(19) ラポー・ガエタン「近代の立川流研究の端緒——井上吉次郎著「文観上人」の誕生の背景を水原堯栄との交流から読み解く——」

『WASEDA RILAS JOURNAL』No.4、平成二十八年十月)の論述による。井上吉次郎が水原堯栄の著作を参考にし、経蔵を閲覧させてもらって研究を行ったことはほぼ確実である。

(20) (17)に同じ。

(21) 井上吉次郎『文観上人』(昭和二十年六月、人文書院)。この著作は、現在、国立国会図書館のデジタルコレクションで、閲覧することができる。

(22) (21)に同じ。

(23) (21)に同じ。

(24) (19)に同じ。

(25) (6)に同じ。

主指導教員(堀竜一教授)、副指導教員(鈴木恵教授・角谷聰准教授)